

みちびきの像ぞう

「お母さん、あの像って高学年の女の子が登校中の小さな子を守ろうとしている姿すがたなんだってね。この間、学校で教わったんだけど。」

ヒロシは、王寺町に住んでいます。ある日、お母さんと車で買い物に出かけたヒロシは、国道二五号と一六八号のちょうど交わる本町一丁目の交差点さで、近くに立っている像を指さしながら言いました。

「そうよ。あの像のモデルの女の子は、田村光代さんというのよ。お母さんが小学校に行くころだったかしら。おばあちゃんおばあちゃんが事故このことを話してくれたのは……」



みちびきの像

その日は、一九五六年の四月三〇日でした。

た。新学年が始まって、光代さんたちは部団だんの子どもたちと登校していました。朝の国道は車の通行量りょうがとても多く、光代さんたち高学年の子どもたちは、小さい子どもたちが歩道からはみ出さないように気を配りながら、学校までの道のりを歩いていたのでした。いつもの国道二五号の陸橋りっ近くにさしかかった時です。一台のトラックが、向こうからスピードをあげて歩道に向かって走ってきました。

「あぶない。」

まさか歩道に向かって車がつっこんでくるなんて思わなかった光代さんが、とっさにできたことは、自分の後ろに小さい子どもたちをかばうことだけでした。そのままトラックは、子どもたちの登校の列につっこみ、光代さんと光代さんがかばおうとした一人の子の命をうばうという大惨事さんとなったのでした。

光代さんたちの家族はもちろん、王寺小学校の子どもたちや町の人々は、深い悲しみにつつまれました。そしてその後、光代さんたちのことをいつまでも忘れず、このような恐ろしい事故を二度と起こさないという願ねがいをこめて、一九六五年に「みちびきの像」が建たてられたのでした。

「ふうん。じゃあその時から、五〇年以上もの間、ずっとあの像はあの場所に立っているんだね。」

お母さんの話を聞いたヒロシが言いました。

「うん。でもね、あの像は二代目なのよ。初めの像は、少し離れた実際に事故の起こったところに建てられていたのよ。」

「えっ。初めからあの像じゃないの。」
「びっくりして、ヒロシは聞きました。」

「ええ。もとの像は三〇年近く、町の人々の手でずっと大切に守られてきたんだけど、雨に打たれ風にさらされている間にぼろぼろになってきたのよ。その姿を見た人たちがね、再建を町の人々に呼びかけたの。その中心になったのが『交通安全母の会』の人たちなのよ。その思いが町中の人々に通じたのね。多くの人たちの協力で、一九九四年に同じ像が今の場所に再建されたのよ。」

「そうだったんだ……。」

「今でもね、春や秋には、母の会や警察の人たちが像の女の子たちの顔や手足をきれいにふいているわ。この間の交通安全週間するとき、お母さんも立哨の後にみちびきの像の所へ行っっていっしょにそうじをしてきたのよ。」

次の日、家を出たヒロシは、昨日のお母さんの話やみちびきの像のことを思い出していました。登校班の班長をしているヒロシは、横断歩道で大きく旗を出し、いつもより大きな声で、

「気をつけよう。」

と班のみんなに声をかけました。

○ ぼろぼろになったみちびきの像の再建を呼びかけ、町中の人々に通じた思いは、どんな思いなのでしょう。

○ 班のみんなに声をかけたヒロシは、どんなことを考えていたでしょう。



みちびきの像のせいそう活動



初めに建てられたみちびきの像